



哲學研究

第百六十六號

第十五卷
第一冊

シエリングの哲學的方法について

十一

赤松元通

翌一七九九年に至つて彼の思想は更に一轉したと考へる事が出来る。此の變化の最も著しい點は前の時期に對して體系的、合理的傾向が強められたことである。

allgemeine Übersicht その他を中心とせる前期に於いても成程合理的傾向を否定することは出来ない、否、むしろ甚だ強い合理的傾向の爲めに本來の、直接なる經驗を重視せんとする所の傾向が屢々抑壓せられんとさへしてゐると云ふ事も既に述べたのであるが、然し此の前期の合理的傾向は今のべんとする時期のそれに比較すれば大體に於いて方法論的態度に於ける合理的傾向にすぎぬと思ふ。而して一方直接經驗、もしくは體驗重視の傾向は合理化的方法の限界を示すと云ふ意味に於いて成程一面に於いては方法論的態度そのものに於ける傾向と考へられるが、然しシエリン

2
グに於いて此の傾向はむしろより多く存在論的方面に於いてのそれであると考へられるのである。彼は經驗を重視はしたが然し決して認識論上の所謂經驗論者とはならなかつた。換言すれば經驗的方法(先験的方法に對する意味に於いて)を重視したのではなくして、むしろ合理的方法そのもの、直接な經驗、或は體驗に基づく事を強調せんとしたのである。經驗と云ふのは方法論的、或は抽象的な概念ではなくして動かすべからざる實在、生ける存在である。従つて彼は前の時期に於いてはかくの如き存在としての經驗を重視しつつ、而かも方法論的態度に於いてその絶對的な合理化を要求したものと考へる事が出来る。而して勿論此の合理化と云ふ事についても色々考へる事が出来るが此處にシェリングが考へた所のものは前にも述べた如く數學的方法を模範とせる數學的合理化の方法であつた。

所で一七九九年に至つてかくの如き、主として方法論上の合理化的傾向が更に擴げられて、存在論的、或は形而上學的思想にまでも及ぼされたと見られるのである。否此の期に於いては前の期に於いて吾々が分析を進める事によつて尙多少分離せられ、區別せられて考へる事が出来る所の存在論的、或は形而上學的方面と方法論的、或は認識論的方面とが全く一つに融合せられたと考へることが出来るのである。

そして此の融合は單に何れか一方を他方に合併せしめると云ふが如き事によつてではなくして、兩傾向をむしろ極端に徹底せしめる事によつて始めて成し遂げられたのである。その合一が即ち宇宙生命の一般的有機體に外ならない。宇宙を單に外的宇宙のみではない)一つの有機體として捕捉せんとする事は此れを完全なる合理的體系として理解せんとする事を含んでゐる。方法は必ず體系に基づかねばならぬ、方法的統一とは體系的統一である。方法論的方向を徹底すれば必ず體系なる概念に來らねばならぬ。一方形而上學的方向をおし進めて有機體にまで及ぼすとすれば有機體そのものが形而上學的存在であつて、單なる經驗的認識の對象ではなく又、決してカントの考へた如き認識論的^な一種の見方 Betrachtungsweise ではないといふ事にならなければならぬ。かくて此の期の中心概念は生ける存在としての有機體といふ事に歸着するのである。有機體なる概念に於いて Methodik 及び Metaphysik とが合一する^{*}とも云ふ事が出来るであらう。

* Meszger, Die Epochen der scholastischen Philo. s. 77.

尙此の事は彼の認識體系に於ける原理の變化としても考察する事が出来る。前にも述べた如く一七九七年及び八年に於ける立場は尙ほ大體に於いてカント的、批

4
 判的立場であり又部分の立場、悟性的構成の立場と云ふ事が出来るが、此れに對して一七九九年の立場は思辨の立場であり、全體の立場であり、理性の立場であるといふ事が出来る。一言にて云へば前の立場は無限なる課題としての理念を部分的に構成し、實現して行く所の云はゞ範疇の能力としての悟性の立場であり、後の立場は實現せられたる構成せられたる理念そのものゝ立場、云はゞ理念の能力としての理性の立場とも云ふ事が出来るであらう。即ちカント的なる批判的二元論の立場を全然脱し切らなかつた前期の立場より一元論モノイズムの立場へ、而かも單に靜的なる點としての統一を要するが如き一元論ではなくして、動的な有機的統一の一元論へと移つて行つたのである。

* 此の事は例へば有機體に關する考方などに於いても明かである。

勿論此の期に於いても決して直接なる經驗が排斥されたと云ふのではないが、前期に於ける程に理性なるものに對立せしめられず、非合理的なるものとしては考へられなかつたのである。否經驗そのものゝ本質に於て合理的なるものを見んとした、或は經驗そのものを或る意味に於いて合理的に演繹デデュツチレンせんとしたとも云ふ事が出来るのである。有名なる「自然に關して哲學する」といふ事は自然を創造すること

ある。』 Über die Natur philosophieren heisst die Natur schaffen (III. s. 13) と云ふ言葉によつても察せられる如く自然を(マテリーとしての自然を)合理的に創造すること、即ち理性即ち思辨によつて自然をその根源より生成せしめると云ふ事が此の期の自然哲學の主要課題であつたのである。此の意味に於いて此の期の立場はメツツガーも云ふ如く一種の汎理論と云ふ事も出来るであらう。

次に彼の體系に關して新しく起つて來た問題は自然哲學と先驗哲學との關係の問題である。シェリングがフイヒテの知識學に對して新しき問題を提出し新しく領域を開拓したと考へられるのは自然哲學であると云はれるのであるが、一七九八年に於ける自然哲學に於いては知識學としての先驗哲學と自然哲學との關係について尙詳細なる説明を缺いてゐたのであるが、此の期に至つて始めて此の問題従つて哲學全體の體係に關しても可成り明瞭なる考へを見ることが出来るのである。九八年に於いては例へば哲學を純粹哲學と應用哲學とに分ち、その各々に又理論哲學と實踐哲學とがあるとし「純粹理論哲學は我々の知識一般の實在性の研究をなすが應用理論哲學は自然哲學 Phil. der Natur の名のもとに吾々の知識の一定の體系(即ち全經驗の體系)を原理から演繹せんとするのである。」と述べてゐる點より推察さ

れる如く此の時期に於いては自然哲學は先驗哲學に對して、獨立なる學科としてそれと同等の資格を以て全哲學の體系に組み入れられるが如きものではなかつたのである。成程哲學が純粹と應用との二つに分かれるとは云つてもそれは決して同等の資格とは考へられない。勿論純粹が主にして應用が従でなければならぬ。即ち自然哲學は知識一般の實在性に關する探究としての先驗哲學(此の期に於いては尙、知識學)の原理の經驗界、自然界に對する單なる應用にすぎないのである。

* Vgl. II. s. 4 (Ideen zu einer Phil. der Natur, Vorrede)

尙、實踐哲學の應用哲學は人間の哲學 Phil. des Menschen としての歴史哲學であるを考へられた。

然るに九九年に於いては自然哲學は更に確乎たる姿を以て現はれ、體系的基礎の上に、先驗哲學と對立し得る様になつたのである。かくて自然哲學は知識の體系に於ける必然的なる學とせられたのであるが、此の事を彼は容知コンゼリゲンツそのものゝ作用の二重性より演繹してゐる。容知の産出作用には盲目的、無意識的のそれと、自由なる、意識的なるそれとの二種がある。然し此の二つの働きは元來同じ働きであつて、哲學は此れら兩作用の根源的同一性を豫想するのである。扱て此の根源的活動の方向としての二つの反對なる方向即ち無意識的、實在的方向と、意識的、觀念的方向との争

によつて種々の所産が産出されるのであるが、實在的ダズレヒなるもの、無意識的なるものを、觀念的グスアイアエレなるもの、意識的なるものに歸せんとすることによつて先驗哲學が生れ、反對に觀念的なるもの、意識的なるものを實在的なるもの、無意識的なるもの、元ユンに包攝せんとすることによつて自然哲學が成立するのである。(vgl. III. s. 272)かくて自然哲學は實在的なるものを先驗哲學は觀念的なるものを基礎としてゐると考へることが出来る。従つて自然哲學、先驗哲學はそれ／＼の學の中に於いては、前者に於いては實在的なるもの、即ち客觀的なるもの、自然が、後者に於いては觀念的なるもの、即ち主觀的なるもの、自我、容知が無制約者と考へられるのである。「自然哲學者は自然を、先驗哲學者が自我を取り扱ふと同様に取り扱ふ、従つて自然そのものは自然哲學者にとつては無制約者である。…… (III. s. 12 Anmerkung)

かくの如く兩學は殆んど同等に取り扱はれたのであるが、然し尙詳細に考察するならばそこに多少の輕重を見出すことも出来る。即ち絶對的同一性は自然所産に於いては、間接に、意識なしに、天才の所産に於いて示される所の活動に於いては直接に表はされる等と述べ、又哲學は無意識的實在的活動を、意識的觀念的活動と同一として定立するが故に哲學の傾向は根源的には、引用者傍點實在的なるものを觀念的

なるものに歸せんとすることに向ふであらう。此れによつて先驗哲學と呼ばれる所ものが成立するのである。……等云つてゐる點などより察するならば九九年には尙先驗哲學に多少の重點をおいてゐたものゝ如くに考へられるのである。

扱て此の無制約者としての自然とは何であるかと云へば勿論決して單に構成せられたもの、即ち所産プロドククトではあり得ない。此の意味に於いてカントの自然とは非常なる相違があると云はねばならぬ。カントに於いては、知らるゝ如く自然とは一般的法則に従ふ限りに於ける物の總體で、従つて悟性の構成と考へられるが、シェリングに於いては、むしろ凡ての構成の根柢となるが如き生産的統一、もしくは生産力そのものである。即ち單に所産であるのみでなく、同時に生産作用、もしくは構成作用そのものである。此の所産であるのみならず同時に生産作用である、云ひ換へれば客觀であると同時に主觀である所の自然なる概念に於いて始めて、かの直觀するのみならず、直觀することを知る所の、即ち自己自身客觀であると同時に主觀である所の自覺としての精神、もしくは自我に相應するものとして、無制約者と考へられることが出来るのである。

然し此の自然及精神(自我)なる無制約者には如何なる關係があるのであるか。若

し兩者とも絶對的に無制約的なるものとすれば、兩者は互に關係はなく、絶對的に獨立なるものとなるであらう。何となれば何らか相互に關係があるとすれば、兩者はも早や無制約的であるといふ事は出來ないであらう。のみならず無制約的なる絶對者なる概念そのものより見れば、二つの無制約者が獨立に存するといふ事さへ許し得ないこととなるであらう。従つて兩者を無制約者として考へんが爲めには、兩者は獨立の實在として相互關係をなすものでも又は爲さざるものでもなく、全く同一のものであると考へなければならぬ。換言すれば自然哲學と先驗哲學とは實は同一の絶對者を持つてゐるのである。自然と精神とは同一の絶對的活動である、唯見方によつて異なるのみ。同じく *das Ideelle + das Reelle* もしくは *das Bewusste + das Bewusstlose* なる活動を實在的なるもの、無意識的なるものとして見る、換言すれば意識的なる活動を無意識なる活動のもとに包攝する時そこに客觀的なる生産的活動としての自然なる概念が生れ、又同じ絶對的活動を觀念的なるものとして見、或は無意識的なる活動を意識的なる活動に包攝せんとするならば、そこに主觀的なる自己直觀的作用としての精神なる概念が生れるのである。

かくて自然哲學は實在的なる、客觀的なる無制約者を根本原理とするものなるが

故にシェリングは此れを *der Spinozismus der Physik* (III. s. 273; *Einführung zu dem Entwurf*) と呼ぶことも出来る云つてゐる。唯だ注意すべきことはシェリングも極力強調してゐる如く (vgl. III. s. II ff.) 自然哲學は決して根源的なる存在としての自然を無制約者とするのではないと云ふ事である。此の事は先驗哲學に於いても同様である。無制約者としての自然は(そして又精神も勿論)唯々根源的なる活動であるのみである。自然を哲學するといふ事は自然をそれが捕へられてゐる所の生命なき機制より救ひ出して、自由を以つて、云はば生かし、そして獨自の自由なる發展に置き入れるといふ事である。換言すれば自然の中に於いて唯々出來事のみを、高々事實としての行動のみを見て、決して行動に於ける行動そのもの *Handeln selbst im Handeln* を見ない所の普通の考方から離れるといふ事である。(III. s. 13)

かくて自然哲學の中に於いては自然が無制約者と考へられ、自然は自分自身に自らの領域^{スラチレ}を與へ、又その法則は他より與へられるのではなく全く内在的^{インネント}で、従つて自然は自己自身の立法者 *Gesetzgeberin* であり、*(Autonomie der Natur)* 又自然の中に於いて起る所のものは皆自然の中にある活動的原理によつて説明せられる、云ひ換へれば自然は自己自身に満ち足りてゐる、*(Autarkie der Natur)* ののである。要するに自然は無制

約的實在性を有するのである。然し乍ら此れはあくまでも自然哲學の中に於いてであつて、決して絶對的ではない。即ち *Autonomie der Natur, Anarchie der Natur* も云はば無制限的のものではないと考へねばならぬ。

扱て自然と精神とが以上の如く同一の絶對者の見方の相違であると云ふ事は果して如何なることを意味するのであらうか。此れは、兩者が單に主觀的な見方の相違と云ふが如きことでは決してないと思はれる。むしろ此の區別の本來の根據は認識論的方法論的な立場にあるのであると思はれる。自然哲學と先驗哲學とは哲學の缺くべからざる二部分であり、兩者は哲學が根柢に於いて豫想すべき根源的な活動の、必然的な、相反する二傾向に基づいて全く反對なる方法、並に課題を持つのである。即ち前述の如く自然哲學は客觀的なもの、實在的なものを中心として主觀的なもの、觀念的なものをそれを歸せんとし、反對に先驗哲學は主觀的なもの、觀念的なものを根柢として客觀的なもの、實在的なものをそれを歸せんとするのである。かくの如き反對なる方法に基づいて夫々の構成に於いて、一方に於いては自然、他方に於いては精神なる無制約者が想定せられるのである。此の意味に於いて兩者は全く反對なる方法論的構成の根柢として豫想せらるべきもので

あるが故に、此の對立に於いては兩者はむしろ認識論的概念と考へる事が出来る。而かもシェリングの思想の特徴としてかゝる認識論的なる概念の背後に、或は根柢に存在論的形而上學的なるものを確信したのであるが故に、此の兩者の根柢に勿論、同一的實在を信じた事は明かである。かくて自然と精神が見方の相違であると云ふ事は、云ひ換へれば全く質的相違であるといふ事は、同一的實在(勿論、單なる存在ではなく活動そのもの)の構成の方法論的なる立場の相違であるといふ事になるのではなからうかと思ふ。

然るに一方、此の自然と精神の相違をかゝる見方の違ひ、即ち云はば質的相違と見る思想と一見全く矛盾した思想がある様に思はれる。それは即ち自然と精神とを連続的なるもの、精神を自然の發展と考へる思想、云はば兩者を量的相違と見る思想である。「睿知は二重の作用で、即ち盲目的及無意識にか、或は自由にそして意識を以つてか、生産的である。世界直觀(即ち自然の構成——引用者註)に於いては無意識的に生産的であり、觀念的世界の創造に於いては意識を以つて生産的である。哲學は無意識的活動を意識的活動と根源的に同一として、そして云はば同一の根柢から出たものとして想定することによつて、此の對立を排除する。……」(III, s. 271)「……

例へば自然に於いて尙ほ電氣である所のものが、睿知に於いては既に感覺にまで進んだといふ事、自然に於いて物質として現はれる所のもは睿知に於いては直観であるといふ事を私は示した。此れは然し自然の絶えざる展相化の單なる結果である。……そして自然哲學は觀念論の物理的説明を與へ、そして觀念論が自然の限界に於いて始まらねばならぬといふ事を證明する。……」(IV. s. 76 ff.) 「物質自身は火が消えたる精神にすぎず或は反對に精神は單に生成に於いて眺められたる物質である。……」(III. s. 453) 「哲學は種々の段階を持てる自覺の歴史であり、そしてこれらの段階を通じてかの唯一の絶對的綜合が繼起的に組成せられるのである。」(III. s. 399) 「これらは自覺の歴史に於ける、不變なる、そして凡ゆる知識に對して固定せる瞬間である、そして此れら瞬間は經驗に於いて、連續的なる段階繼起——それは單純なる素材から有機制まで、(此の有機制によつて無意識的生產的自然が自分自身にかへる)そして又そこから理性及氣隨を通して、藝術に於ける自由と必然性との最高の合一まで(此れによつて意識を持つたる生產的自然が自らの中に終結し、そして完成する。)示され、そして續けられる事が出来る。——によつて表はされてゐる。(III. s. 634)

以上述べた例に於いて推察される如く自然及精神は、その根柢に於いて同一なる

14 ものと考へられながら、同時にその同一的なるものが絶えず發展し、生成するもの、換言すれば絶えず展相化し、自己客觀化するものと考へられたのである。従つて此の場合の自然及精神は、前の場合の如く單に認識論的な概念とは考へられず、むしろ存在論的な概念として考へられる。即ち自然、精神は生きたる存在であり、同一的絶對者の活動である。その相違は見方の相違ではなくして、それ自身に於ける相違同じ絶對者の發展の過程に於ける程度の相違、段階の相違と考へられるのである。

此の兩方の立場より見たる此れら兩概念の關係についてはシェリング自身此れら二つの立場を明確に區別せず——否區別しない所にむしろ彼の、殊に此の期に於ける特色があるのであるが——従つて勿論二つの立場よりの此れらの概念の關係を明瞭に規定してゐないのである。その爲めに兩概念、従つて又それらを基礎にしてゐる所の自然哲學、先驗哲學、及その關係について多少の混雜動搖を來たしたのではなからうかと考へられるのである。

前にも注意した如く此の期に於いて自然哲學、先驗哲學の重んじ方が多少動搖してゐると考へられるのも、此の認識論的方面を重視したか、或は又存在論的方面を重視したかによつて影響を受けたのではなからうかと思はれるのである。九九年の

Erster Entwurf 及び Einleitung には、前にのべた如く大體に於いて併立的、對等的と考へられたが、然し尙、根柢に於いて先驗哲學を重視し、一八〇〇年の「先驗的觀念論の體系」に於いては序論にも明白にのべてゐる様に兩者を全く同等と考へてゐるのは、前者に於いては存在論的思想が比較的重きをなし、従つて自然、精神も此の方面から主として考察せられ、兩者を動的に精神は自然の發展、従つて精神は自然の目的であり、更に高き展相であると考へられるが故に精神が、従つて又先驗哲學が重視せられるに對して、後者に於いては方法論的、認識論的思想が根柢をなしてゐるが爲めに兩概念も主として此の方面より考察せられ従つて兩概念、並にそれに基づく自然哲學、先驗哲學は全く對立的、併立的のものとして考へられるに至つたのではなからうかと思はれる。此の故に、同年の、又は同一の著作に於いてさへも、或は認識論的、方法論的方面から、或は存在論的、形而上學的方面から眺められ、もしくは、それらの方面が強調せられるに従つて自然、精神の關係が認識論的となり、又は存在論的となり、兩哲學が同等と考へられ、或は又先驗哲學が重んぜられたりするが如き言葉が現はれてゐるのも首肯し得られるのではないかと思ふのである。

尙一八〇〇年に於けるが如く自然哲學、先驗哲學が併立的に考へられるに至つた

理由として、存在論的思想そのもの、中に働いてゐる次の如き思想傾向を否定することは出来ない様に思はれる。それは即ち絶對者を動的に自然より精神へ連續的に發展する所の過程と見るのではなくして、むしろ靜的に自然そのものでもなく、又精神そのものでもなく兩者即反對なる方の平衡として、或は兩者の無差別として考へんとする所の思想である。かくの如き考方から云ふならば所謂精神も所謂自然も共に偏つたものである。その何れを重視するわけにもいかなない、重視せらるべきは兩者の根柢たる無差別のみである。此の思想は一八〇一年以後に初めて明瞭なる形を以つて現はれ、所謂狹義の同一期哲學の中心思想をなしてゐるものと考へることが出来るのであるが、然し既に一八〇〇年の先驗的觀念論の體系、或は、動的過程の一般的演繹 *Allgemeine Deduktion des dynamischen Prozesses* に於いても此の思想の萌芽を充分に見ることが出来るのである。

十二

扱て次には此の期に於ける方法論的なる諸概念について少しく考察して見やう。前期(九七年九八年)の方法論的叙述に於いても既に引用した如くシェリング自身此らの期の著作に於いて殊に重要な意味を有するものは客觀的方法、即ち絶對的

自我の自己直観による自己客観化の方法——これは先驗的觀念論の體系に最も明かに敘述せられてゐる——である。と云つてゐるのである。(本稿七節及び八節参照)

かゝる客観的方法が成立せんが爲めには何らかの意味で必ず生成的なるものを認めなければならぬと云ふ事も既に述べた所である。然らば此の期に於いて如何に「生成的なるもの」が認められたか。

自然哲學は經驗的物理学ではなく思辨的物理学として換言すれば自然のアプリアオリなる知識の體系、即ち最高なる根源的統一的原理よりの内的關聯の演繹として成立するのであるが、かゝる物理学は先づ機械的な道程に於いては求められない動的な道程に於いて始めて求められるのである。「運動の絶對的原因——これなくしては自然は自らに於いて全體であり、完結したものではない——を探究せんとする此の學の第一の問題は決して機械的には解決することが出来ないが故に——といふのは機械的に無限に進んで行くも運動は唯だ運動からのみ出づるが故に——思辨的物理学の眞の建設には唯だ一つの道即ち動的なる道が、次の如き豫想を以つて、開かれてゐるのみである。即ち運動は單に運動からのみでなく、それ自ら静止から出づるといふ事従つて又自然の静止に於いては又運動があると云ふ事、そして凡て

の機械的な運動は、自然一般の構成の要素根本力より出づる所の唯一の原始的根源的なる運動より導かれた單に第二次的な、派生的なものにすぎないといふ事これである。¹⁾

従つて此れらの點より根源的なる運動因を自然の中に求めやうとせず、單に第二次的原因のみに關つてゐる所の經驗的物理学と彼の思辨的物理学との區別も自ら明である。

思辨的物理学は一つの學、^{ウイッセンシャフト}即ちアプリアオリなる知識の體系である。所で *Wiss-*
enschaft に對してゐるものはシェリングによれば *Empirie* に外ならぬ。全然エンピリ
ーとしての物理学なるものは單に事實の集合^{ファクト}にすぎず、かゝるものは到底學として
許すことは出来ないが、然し普通に所謂物理学として考へられるものは純粹なるウ
イッセンシャフトではなくして、云はばウイッセンシャフトとエンピリーとの混合
にすぎない。思辨的物理学の課題の一つは此の二つを明かに區別してアプリアオリ
な構成によらないものをウイッセンシャフトに拒みつゝ、凡ての理論よりエンピリ
ーを剝脱することにある。然らば此の兩者の區別は如何なる點に存するか。兩者
は決して獨立の、別個の存在として考へられるべきではない、云はば方法論的なる見

方の上に現はれるものと考へられる。エンピリーはその客觀を存在の中に、出來上
 りたるものとして im Sein als etwas fertiges und zu Stande Gebrachtes 觀るに對してウイッ
 センシャフトは客觀を生成の中に、そして仕上げらるべきものとして im Werden und
 als ein erst zustande zu Bringendes 觀るのである。(vgl. III. s. 283)そして此の事は又アッ
 リオリなる命題とアポステリオリなる命題との關係について述べてゐる所の思想
 に應ずる所があると思はれる。「吾々は單に此れ或は彼れを知るのみならず、一般に
 根源的に經驗によつての外は何物も知らない。そして此の限りに於いて吾々の
 全知識は經驗命題より成立する。此れらの命題は唯だ人がそれらを必然的として
 意識することによつてのみアプリオリな命題となる。かくて凡ての命題はその内
 容が何であれ、かの威嚴アプリオリ命題——引用者註にまで高められる事が出来る。
 といふのは、アプリオリとアポステリオリとの命題の區別は多くの人々が恐らく想
 像した如くに命題そのものに本來附着せる區別ではなくして、單に此れらの命題に
 關する吾々の知識及吾々の知識の性質に關して作られたる區別にすぎない。従つ
 て私に對して單に歴史的である所の凡ゆる命題は經驗命題であるが、然し私が直接
 に或は間接にその内的必然性の洞察をなすや否やそれがアプリオリな命題とな

るのである。」(III. s. 278) 同様な考方が勿論先驗的觀念論の體系に於いても見出される事が出来る。(vgl. III. s. 527. ff., s. 531.)

要するにエンピリーとして見る、従つて又アポステリオリな命題として見るといふ事はその客觀をザインとして見る事、云ひ換へれば客觀を單にそのものとして、生きたる全體との關聯より切り離して、云はば斷片として觀ることであるに對して、ウィツセンシャフトとして、従つて又アプリアオリな命題として見るといふ事はその客觀をウエルデンとして見ることであり、又發展する所のものとして見ることによつて根源的なるものよりの生成を明かにし、それを斷片と見ずして全體的體系の一モメントとして見るといふ事でなければならぬ。従つて又かゝるウィツセンシャフトの中には必然的に全體的統一としての根源的なる原理、即ち絶對的なる無制約者なる概念が含まれてゐなければならぬ。思辨的物理学としての自然哲學の出發點は正にかくの如き無制約者と考へられる。 Da die Wissenschaft von nichts auszugehen kann, was Produkt, d. h. Ding ist, so muss sie von dem Unbedingten ausgehen; die erste Untersuchung der spekulativen physik ist die über das Unbedingte der Naturwissenschaft. (III. s. 283)

扱て客觀をウエルデンとして、或はウエルデンに於て眺めると云ふ事は果して如

何なる事であるか。

先づ客觀をウエルデンに於て眺めると云ふ事は今云つた如く此れを單に靜的に孤立せるものとしてではなく、動的に、有機的な全體の統一の立場より見るといふ事であり、此の期に於いて用ひられたる言葉にて云ひ表はすならば、デユナーミツシユに見ると云ふ事に外ならない。デユナーミツシユに見るといふ事は、従つて *dynamische Philosophie* は) シェリングが *Erster Entwurf eines Systems der Naturphil.* の緒言に於いて述べてゐる如く今迄誰れもかゝるものを企てなかつたが故に *Erster Entwurf* と名づけられた如くに、此の著作並びにそれ以後の著作の方法の根本的なる一特徴をなしてゐるものと考へることが出来る。勿論かくの如き思想への萌芽は既に前期に於ける方法論的敘述にも明かにした如く充分に認めうるのであるが、然し當時にあつては尙その輪郭が不明瞭で、方法論的に充分自覺されてゐたと云ふ事は出来なかつたのであり、殊に後に明かにする如く、その方法の根柢に對する考が當時と此の期に於いては多少の變化をしてゐることを否定し得ないのである。

扱てデユナーミツシユに見るといふ事は、先づメハーニツシユに見ると云ふ事に、第二に單にエンピリツシユに見るといふ事に對して區別されなければならぬ。メ

ハーニツシュといふのは單なる物體的な單純なるものを認め、それらの因果必然的なる結合によつて自然を説明せんとする機械的原子論の考方であり、エンピौरリツシュといふのは自然の説明に對して單に經驗的なる範圍以上に出づる事の出來ない、従つて根源的なる運動原因に關することが出來ず、自然の最後の制約を決して充分に明かにすることの出來ない方法である。かくの如き經驗的なる見方に對してデユナイミツシュに見るとは、換言すればスペクラテイズに見るとは自然の第一原因、自然の無制約者を自然そのもの、中に認め、それより自然全體を導くことに外ならない。云はゞ前者は、自然に於ける客觀的なるもの、外面的なるもの、表面的なるものに向けられてゐるに對して後者は自然に於ける非客觀的なるもの、内的なる機關に向けられてゐるのである。(Vgl. III. S. 275) かくてデユナイミツシュに見るといふ事は成程エンピौरリツシュに見ると云ふ事ではないが、然し又デユナイミツシュに見ることは全く經驗を離れた抽象的思惟であると考へらるべきではない。此の故にシェリングも屢々、而かも誤解され易き言葉を以つて、スペクラテイズの立場は、Reflexion の立場ではなくして Anschauung の立場であると述べてゐるのである。デユナイミツシュな過程は勿論、經驗的なる過程、時空因果などによつて限定されたで

はないが、然しかゝる過程に於いて捕捉せられる所のものである。デユナーミツシユな過程とは「マテリー」としての自然そのものが歩む所の過程である。自然は所産としてのマテリーに於いて始めて經驗的となり現象するものであるが、此のマテリーそのものがDifferenzよりIndifferenzへと發展する過程が即ちデユナーミツシユな過程である。而して此れは段階シュテットツフホレをなして進むが故にdynamische Stufenfolge der Naturとも云ふ事が出来るのである。シエリングは此の段階を又Kategorien der Physikと呼び此れの演繹を自然哲學として思辨的物理学の課題となしたのである。然し此れらの段階即ち自然が必然的に經過する所の種々の瞬時は決して普通の意識に於いて、そのまゝに現はれるものではない。「此の區別〔種々のモメントの區別——引用者註〕は唯だ思辨スベクラチオンの爲めにのみなされるのである。そして人は自然がかの諸モメントを實際に時間ドウルヒラウフエンに於いて通り過ぎると決して考へてはならない。それらのモメントはデユナーミツシユなものであり、形而上學的に自然の中に基づけられてゐるのである。そして思辨の爲めに分離せられる所のは自然そのものに於いては勿論一つであり、分離されてゐないのである。かくてマテリーそのものゝ構成に於いて所産の第三の次元と共に第一、第二の兩次元も亦同時に定立せられてゐるのである。

然し凡ての眞の構成は生成的であらねばならぬといふ理由によつて、かの區別を必然的として見出したのである。マテリーの存在は二つの力の對立に基づくと云ふ事を知るだけでは未だ十分ではない。此の外に尙、かの二力によつて空間が現實的に充實されると云ふ事が如何にして可能であるかと云ふ事が明かにされねばならぬ。凡ての空間充實は必然的にある程度に従つて限定されたものであるが故に力の力によつて如何にして空間充實が成立し得るかといふ事が明かにされねばならぬ。此れらの間はマテリーなる概念の單なる分析によつては答へられない。かくの如き單なる論理的なる仕事のあとには常に眞の総合的な仕事、即ちかの二つの力の對抗によつて空間が現實に、而かも一定の程度に於いて充實せられる所かの機制そのものを露はすといふ働きが残つてゐるのである。此の機制は唯それが分解せられ、即個々のモメントに分離せられて表象せられる事によつて始めて明かにせられるのである。(IV s.26)

かくの如く dynamischer Prozess はマテリーそのものが自ら歩む所の道程であるが、然し此れは單なる現象としての empirischer Prozess と異なり、云はゞ自然の本質そのものが實現されて行く過程、眞なる價值としての自然が自覺して行く道程として考へ

られる。然るにマテリーそのものは既に構成せられたものである。自然に於ける根源的なる二重性によつて自然それ自身によつて生産されたものである。(ibid. III. s. 283ff.) 然し此の構成、此の生産は經驗的に、即ち直觀に於いて現はれることは出來ない。何となれば現象はマテリーと共に始めて現はれるが故である。唯だ此のマテリーの再生産のみが——マテリーそのものが又生産し構成し得るのである。マテリーは單に死せる物質ではなくしてダイフェレンツからインダイフェレンツへと發展する所の機能である。——經驗的に現はれ、そして唯だそれによつてのみ生産が明らかにせられるのである。従つてマテリーが始めて成立する所のかの二重性の對抗による根源的構成が第一の構成、第一の生産であるとすれば構成されたるマテリーの過程たるデュナーミツシユな過程は第二の構成と云ふ事が出来るのである。

「デュナーミツシユな過程はマテリーの第二の構成に外ならない。そしてマテリーの根源的構成に於ける諸段階があるだけ、デュナーミツシユな諸段階が存する。」(III. s. 320)

然し第二とは如何なる意味を有するのであらうか。根源的構成と第二の構成と

26
 は如何なる關係を有するのであらうか。

根源的なる構成をそのまゝ模倣したのが第二の構成としてのデュナーミツシユな過程であるのではない。具體的なる自然の作用が、かゝる第二構成によつて始めて生成的に明かにせられるのである。従つて此れは勿論、單なる第二、單なる模倣ではない。成程、自然の根源的なる二重性によつてマテリヤは生産せられる。然しそれは全く、根源的に、そして一時にである。即ち内面的ではあるが凡てのモメント、凡ての段階を以つて同時に定立せられてゐるのである。然しかゝる働きは勿論、そのまゝとして、即ち生産性プロドゥクティビゼットとして現象することは出來ず、その所産たる所のマテリヤの再生産によつて、即デュナーミツシユな過程によつて始めて繼起的に明かにせられるのである。此の事は丁度自覺に於いて、自我は成程自覺の根源的なる作用によつて、凡てのそののモメントを以つて成立してゐるのであるが、然しかゝる根源的作用は勿論、そのものとしては現はれることは出來ず、そのの所産なる自覺の種々の段階、即ち自覺の歴史によつて、繼起的に、生成的に明かにせられうるので同様であると思へられる。従つてデュナーミツシユな過程が第二の構成、再生産と呼ばれるならば同じ意味に於いて自覺の歴史としての先驗的過程も亦第二の構成、再生産

と云はれることが出来るのである。尙先驗哲學の方法論的反省については後に述べやうと思ふ。

かくて「所産のデユナーミツシユな過程に於いて認められる所のものは、凡ての二元性デュアルの單純なる要素を以つて所産の彼方に於いて起る。」といふ命題の所産の彼方エーゲンガイなる意味も略々推察し得るのである。即ち所産の彼方は根源的構成の世界であり、吾々の直觀を離れたる世界である。「磁氣、電氣化學的過程は自然〔物質〕の根源的構成の範疇である。此の根源的構成は吾々から離れ、直觀の彼方にあるが、かの三つのもものは殘留し確立し固定されたものである、即物質の構成の一般的シエーマである。」
(III. s. 321)

扱て然らばかゝるデユナーミツシユな過程と先驗的過程との關係は如何。先づ兩者は全く反對なる方向にあるものゝ様に見える。自然と睿知とは方法論上全く正反對の方向にあるものと考へられるが、デユナーミツシユな過程は、自然そのものゝ過程であり、先驗的過程は自我もしくは睿知そのものゝ過程である。前者はマテリーとして自然の再生産の過程、後者は睿知の自覺、即それの自己直觀もしくは自己客觀化の過程である。更に換言すれば或る物をデユナーミツシユに説明すると

いふ事はそれをマテリーの構成の制約より導くといふ事であり、又或物を先験的に説明するといふ事はそれを認識の制約より導くといふ事である。然し乍ら、かゝる反對にも拘らず兩者は決して全くの別物ではない、結局同一の原理に歸するのである。九八年の自然哲學に於いてはマテリーの構成は凡て直觀の作用より導かれ従つて此の點に於いてマテリーの構成と意識の構成との同一は主觀的な方面に於いてではあるが非常に明瞭に示されてゐるのであるが、今の自然哲學はかゝる主觀的な導出を廢して客觀的に徹せんとしてマテリーを自然自身の二重性より導かんとしたのであるが、然しそれにも拘らず、やはり此の根柢に絶對的に觀念的イデアなるものゝ働きを否定することは出来なかつた、否自然の根源的なる働きは直ちにかゝる觀念的なる働きと同一として想定せざるを得なかつたのである。「次の如きことが豫想せられた。即ち自然は唯一の根源的なる内インヴェオルテオーン含からの發展である。此の内含は然し上に述べた所によつて、決してレエルなものではあり得ない。従つてそれは作用として即ち唯だイデエルである所の、そして云はゞ先験哲學と自然哲學との轉回點を示してゐる所の絶對的綜合として表象せられうるのみである。」(III. S. 268)

此の絶對的綜合は然し單にイデエルではなくして、むしろイデエルにして同時にレ

エルである所のものであり、精神と自然、先驗的過程とデユナイミツシユな過程との同一的根柢を暗示してゐると考へられるのである。そして翌年の『Allgemeine Deduktion』に於いては更に、先驗的なものとデユナイミツシユなものとの關係について次の如くに述べられてゐる。「デユナイミツシユなるものが物理學に對する關係は先驗的なものが哲學に對する關係と同一である。そして物理學に於いて、デユナイミツシユに説明するといふ事は哲學に於いて先驗的に説明するといふ事になる。ある現象がデユナイミツシユに説明せられるといふ事はそれがマテリイ一般の構成の根源的な制約から説明せられるといふ事である。従つてその説明にはかの一般的根據の外に何ら特殊な想像されたる原因、例へば個々のマテリイの如きものを要しない。凡てのデユナイミツシユな運動は、その最後の根據を自然そのもの、主觀に、即ち可視的世界が、それらの單なる足場である所の諸力に、有するのである。」(IV s. 76)

此の事は「先驗的觀念論」の側からも考察することが出来る。「先驗哲學は自我の絶えざる展相化である。その全方法は自我を自己直觀の一段階より他の段階へ、そして遂に自我が自覺の自由なるそして意識せる作用に於いて含まれてゐる所の凡て

の規定を以つて定立せられる所の段階にまで導くと云ふ事にあるのである。睿知の全歴史がそこより出發する所の最初の作用は自由ではなくして尙無意識的である限りに於ける自覺の作用である。哲學者が最初に意識せずして思惟せられたるものとして要請する所のその作用が吾々の客觀、即ち自我の最初の作用を與へる。此の作用に於いて自我は吾々にとつては成程、同時に主觀及客觀ではあるが、それ自身にとつては然し決してそうではない。それは云はば二つの活動、即ち本來制限せられざる活動と制限する所の活動とが尙ほ合一してゐる所の、物質の構成に於いて認められたるかの點を示してゐる。(III. S. 450)かくの如く「自我はそれを知ることなしに既に最初の作用から物質の構成に向つて進んでゐるのである。デユナーミツシユなものど先驗的なるものとの同一性を吾々に更に詳しく示す所のものは次の如きものである。かの第二の作用は感覺の作用である。扱て感覺によつて吾々の客觀となる所のものは性クヴァリテット質クヴァリテットに外ならない。然し凡ての性質は唯だ電氣である。勿論此れは自然哲學に於いて證明せられる所の命題である。然し電氣こそは自然に於いて、構成のかの第二の瞬間がそれによつて示される所のものである。従つて人は睿知に於いて感覺である所のものが自然に於いては電氣であると云ふ事が出

來るであらう。第三の作用と物質の構成の第三の瞬時との同一と云ふ事は實際證明を要しない。云々」(III. S. 452)かくて自我の無意識的なる働きとしての睿知の理論的作用の全體は結局自然哲學の全開展に一致し「自然のかの三つの瞬時、即ち物質構成の三つの瞬時は實際自覺の歴史に於ける三つの瞬時である」のである。

次には此の期の自然哲學と前期の自然哲學との相違を方法論に關する限りに於いて考察して見やう。今迄見て來た如く此の期の自然哲學はマテリイとしての自然のデユナーミツシユな過程を明かにせんとすることを根本課題としてゐる。然し此の事は前期の自然哲學についても云ひ得ることであつて、成程デユナーミツシユな過程といふ事が今程に明らかに語られなかつたとしても、やはりその根本課題としてマテリイの演繹を、而かもその方法として先驗生成的にマテリイをその根源より導かんとしてゐるのであるが故に、兩自然哲學には全く同一の方法が——即ち先驗生成的、もしくは客觀化的の方法が——働いてゐると思はれるのであるが、然し更に詳細に考察するときには、そこに、シエリングの自然そのものに對する可成り重大なる思想の變化を従つて當然又方法論上に於ける變化をも見る事が出来るのである。

先づ前期に於いては、フイヒテの「自我」或は「意識」の暴威に對して「自然」を救ひ、その獨自の實左性を認めんとして、知識學に對して自然哲學なる全く別個の領域を開拓したのであるが、然し當時は尙ほ全くフイヒテの影響を脱することが出來ず、自然の演繹の根源を尙ほ自我精神、もしくは直觀におき精神、即ち直觀の根源的なる二重性よりして自然を、従つてマテリーを導き出したのである。(vgl. II. 213 ff.) 従つてかゝる演繹によつては、成程、勿論自然を單に自我の現象と見、もしくは單なるその手段として見る考方からは自由になりうるとしても、尙自然の徹底的なる獨自性を基礎づけ、その完全なる實在性を保證することは出來ないと云はねばならぬ。

此處に於いてシェリングは此期に至つて自然を自我もしくは意識に全く對立せしめて、自然そのものを無制約者と考へ(勿論自然哲學に關する限りに於いてではあるが)自然の Autonomie 自然の Autarkie を、要するに自然の無制約的實在性を認めんとしたのである。(vgl. III. s. 17) かくて自然は決して自我もしくは精神によつて始めて存在し、もしくは基礎づけられるのではなく、自然は自ら存在し、それ自らが自らを基礎づけるのである。自然はそれ自身に於いて作用の根源的なる二重性を有し、これの抗争及び統一によつて即ちダイフェレンツ、インダイフェレンツによつて段階

的に自らを構成して行く所の動的統一である。そしてかくの如き根本思想に於いて一見、獨斷的とも見られる所の次の如き言葉も理解することが出来るのである。「決して吾々が自然を認識するのではなく、自然はアブリオリにあるのである。即ち自然に於ける凡ての個々のものは、豫め全體によつて、即ち自然一般の理念によつて限定せられてゐるのである。然し自然がアブリオリにあるが故に、それをアブリオリにあるものとして認識するといふ事も亦可能であらねばならぬ。そして此の事が本來、吾々の主張の意味である。……」(III. s. 279)

扱て前の期には、マテリーの演繹の根源は主觀的なる意識もしくは直觀であり、従つてその演繹の仕方はシエリング自らも *transzendente Erörterung* と云つてゐる如く (Vgl. II. s. 214) 先驗的——イデェルなる直觀に於ける基礎に關するが故に——であるが、此の期に於いてはマテリー演繹の根源は獨立的なるものとしての自然それ自身である。意識を主觀と云ふならば全く客觀のものである。かくて此れのマテリーの演繹の仕方も、早や先驗的ではなくして客觀的なる自然そのもの、所産に於ける段階的過程に於いて、自然そのもの、發展の足跡をあどづげんとすることにならざるを得ない。これが *dynamische Erklärungsart* と呼ばれる所のものである。而

かもデユオナミツシユな過程と先驗的過程とは既にのべた如く結局は一に歸すべきものであるが故に——此の問題を根本課題としたのが狹義の同六哲學であることは云ふまでもない——此の自然哲學の仕事は又 *physikalische Erklärung des Idealismus* (vgl. IV. s. 76) と云ふ事も出来るのである。かくて兩自然哲學の方法も勿論共に經驗的なる生成的方法に對すると云ふ意味に於いては先驗生成的方法とも名づけ得るのであるが、然し一方に於いてはその根源を主觀的なる意識に、他方に於いては客觀的なる自然そのものに求めてゐるといふ點に於いて注意すべき相違點を見出す事が出来ると思はれるのである。此れらの點より見てシェリングの立場が漸次にフイヒテの主觀的觀念論の立場を離れて行きつゝある事を看取する事が出来る。此の事は尙次の如き言葉によつて一層明かとなると思ふ。

「以上の事から自ら次の事が出てくる。此の學〔自然哲學〕に於いては先驗的哲學が與へうるが如き觀念論的説明法は決して起らない、といふのは、先驗哲學にとつては自然は自覺の機關に外ならず、そして自然に於ける凡ゆるものは、かくの如き〔自覺の機關にすぎない所の〕自然によつて自覺が媒介されることによつてのみ、必然的となるのであるが、かゝる説明法は然し物理學及、それと同様の立場に立つ所の吾

吾の學にとつては全く無意味であるからである。……凡てのものを又自然力から説明せんとする凡ての眞の自然科學の第一の格率は従つてそれが非常に擴張せられて吾々の學によつても承認せられるのである。……」(III. s. 273)「唯だ物理學者のみがかの欺瞞を(主觀的觀念論のそれを指す——引用者註見破る。従つて吾々は哲學に於いて今や懷疑的であり、基礎を見ない所の凡ての人に對して『物理學へ來たれ、而して眞理を認識せよ』と呼びかけた。」(IV. s. 76)

扱て以上の敘述に於いて、吾々は自然をマテリイとして考察して來たが、此れは屢々のべた如く勿論單なる所産ではなく同時に生産的である。眞に具體的なる自然とはかくの如き同一性でなければならぬ。而してかゝる具體的なる自然は勿論抽象的なるもの發展として、その一面を表はしてゐる所の自然の諸モメントを内に含んでゐなければならぬ。此れらのモメントはかくて自然が具體化し、現象するに至る過程を表はしてゐると考へることが出来る。先づ第一のモメントは主觀としての自然である。此れは純粹なる生産性プロドクティブキヤイネートとしての自然、換言すれば (Natura Naturans) である。自然哲學の對象は決して *facta* な固定せるものではなくして生成するものである。即ち單なる所産ではなく生産性で、自然に於ける非客觀的なるも

のでなければならぬ。即ち主観としての自然であり、アプリアリなる自然である。然し乍ら、かゝる創造的自然が成程思辨的認識の對象であるとしても然しかゝるものは決して、そのものとして現はれるのではない。それはその働き、その所産の中にひそんでゐるのである。従つてかゝるアプリアリな自然を認識せんが爲めには必然的に所産としての自然に眼を向けなければならぬ。かくて第二のモメントは客観としての自然、所産としての自然、*natura naturata*である。一體自然が眞に具體的な自然として存在せんが爲めには生産的であるのみでは不十分である。必ず可認識的でなければならぬ。自然が如何にして可能であるかと云ふ間は勿論此の二面より答へられねばならぬ。自然が若し單に生産性のみであつたならば單なる生成で、決して認識されない。自然として認識されんが爲めには、必然的にその活動が所産に於いて現はれ、客観化されねばならぬ。然し又その活動が全然所産となり、客観化され終るならば又生産性としての自然も、従つて所産としての自然もなくなつてしまふであらう。従つて自然は單に生産的でもなく、單に所産でもなく同時に兩者であり、兩者の同一であらねばならぬ。かくて第三のモメントは主観客観としての自然である。所産及生産性の同一としての自然である。然し乍ら、次に此の統一

は如何にして可能であるかと云へば、凡ての自然所産に於いて自然の活動が阻止されて現はれ、而かも此の阻止の根據が自然自身の中にあるといふ事、換言すれば自然は反對なる二つの傾向を含んでゐるといふ事である。自然の可能は同一の創造的自然の中に於ける此の二分ニエトワウイウンクに基づいてゐるのである。而して此の兩活動が全く同様に互を絶滅するに至るならばも早や以後は所産の生産もなくなるであらう。眞に具體的なる自然、現實的なる客觀が成立せんが爲めには所産が絶えず成立しなければならぬ。即ちそれは絶えず再生産し無限に自ら生産的とならねばならぬ。かくて所産は無限なる發展への衝動を有せねばならぬ。かくて單なる主觀客觀としての統一は更に無限なる發展としての動的統一にならねばならぬ。即ち自然の第四のモメントとして無限なる發展系列若しくは變態メタモルフォーゼが考へられる。最後に自然は如何にしてかくの如き無限なる發展系列として認識せられるかと云ふ問題が提出せられる。若し自然が全然絶えざる Metamorphose にすぎないならば所産は實は一定の状態シユクランドではなく單に傾向アシゲツツであり、何らの存立ベグシュタンを持ち得ないものとなるであらう。従つて十分に直觀され、認識され得ないものとなるであらう。故に自然がかゝる無限なる發展として認識されんが爲めには何らかの意味に於いて常住ベルマネントなものが認め

られねばならぬ。かゝることは如何にして可能であるか。これこそ實に自然哲學の説明すべき課題である。凡ての變化に於いて恒存ペリツヒなものが如何にして考へられるか。先づ次の事が必要である。一、自然が所産として存在すること、二、此の所産が變化すること(形をかへる)、三、此の變化に於いて、それは恒存すること。若しそれから所産が生ずるが如き反對せる因子が互に絶滅し合つて凡ゆる活動を排除するならば所産も存しない。若し兩者の中何れか優勢で絶えず變化するならば靜止がなく恒存がない。従つて兩因子は平衡ゾライヒクワイヒトが起る様に互に結びつかなければならぬ。此の平衡に於いて所産は固定せられ、凡ての變化の恒存的基體ペリツヒ、デフストライトとして現はれるのである。此れが物質ズブリに外ならない。自然は唯だマテリーに於いてのみ可認識的である。創造的自然がその中に集中されてゐる所の所産は無限なる發展への衝動を持たねばならぬ。マテリーは従つて生産的であり、發展し得るものであり、發展力を持つたものである。その發展の段階は恒存的ペルマネントであり常住である。マテリーがそれから出て來る所の力は先驗的であるが、マテリーに於いて働き物質力として現はれるところの力はデユナーミツシユであるが故に、マテリーの發展はdynamische Stufenfolgeである。かくて自然の最も具體的なる規定としては dynamische Stufenfolge としての

マテリイと云ふ事が出来る。そして此の中には以上のべた凡てのモメントが取り入れられ、その底に沈められてゐるのである。(vgl. III. s. 284f. u. K. Fischer s. 422ff.)

扱て以上見た如く彼の自然哲學の根本思想は大體に於いて一元的傾向にあり而かも靜的なる一元ではなくしてデュナーミツシユなる一元を認めると云ふ點に於いて Monismus des Dynamischen と云ふ事が出来、そして此の點に於いて又彼の前期の批判的・二元論とも區別することが出来ると思ふのであるが、然し此處にかくの如き一元論に反對なるが如き考方の見られる事が注意せられる。それは即ち Pluralismus の立場、Atomismus の立場である。彼は「第一草案への序論」に於いて自らの立場を dynamische Atomistik と云ふ事が出来るとして次の如く述べてゐる。

「若しアトミステイクが質クヴァリテイトの觀念的なる説明根據として單一なるものダクスイーンフアツヘを主張

する所の主張であるならば吾々の哲學はアトミステイクである。然し此れは單一なるものを所産ではなく、唯々生産的である所のものにおくが故にそれはデュナーミツシキアトミステイクである。(III. s. 293) 然し乍ら此の多元論或は原子論は、成程靜的なる、そして全然多を許さない一元論にとつては打ち克ち難き矛盾であらうが、むしろ多そのものの上に立ち、多を包含する所の、換言すれば發展を認める所の

動的一元論にとつては矛盾とは考へられないであらう。何となればデュナーミツシユな一者はかくの如き單一なるもの、純粹作用ラネアクトイオンを通じて始めて現はれると考へねばならぬからである。然し此の單一なるもの、單一なる作用はあくまでも觀念的イデアレム説明根據であつて存在エグジステンスするものと考へるのではない。自然の開展が完成したであらうならば然しかゝる事は不可能である(凡ての所産の分離の後唯だ、それ自ら所産たらぬ單純なる要素の外何物も残らないであらうといふのである。何となれば自然は所産として始めて吾々に現はれ、従つて存在するに至るのである。然るに所産として現はれんが爲めには純粹同一性としての生産性(即單一なる純粹作用)が破棄されて二重性とならねばならぬからである。

然しかゝるマテリイ即ち質の根據としての單一なるものは決して單に普通の分析的な仕方によつて現はれるものではない、唯だデュナーミツシユにのみ考へられるものである。又、かゝるものとして決して空間に於いてあるものでもなく、又それの直觀も可能ではない。唯だ此れはその所産によつてのみ直觀せられうるにすぎない。従つて此れは單なる分析の結果として考へられたる一種の抽象的なるもの——例へば心理學的分析によつて考へられたる單純感覺の如きもの——とは全

然異なるものである。全くの無ではない、働いてゐるのである。然し經驗的にはかゝるものとして直觀されないと云ふにすぎない。丁度點が線への傾向である様アンザツに此れは所産へのアンザツである。一言にて云へば reine Entelechieとも云ふ事が出来る。(III. s. 293)かゝる單一なるもの、それは全く個別的で各自皆自分自身に於いてあり、又完結してゐる所の云は々 Naturmonaden (III. s. 23)とも考へらるべきものは前にも暗示した如く根源的作用としての自然の生産性そのものに外ならない。而してそれ自身としては認識されないが、その所産に於いてのみ認識される所のかゝるものは唯だ經驗的にのみ認識される。凡ての根源的な質は質としては純粹強度ライネインザンゼンヂヤートであり、此れはも早や構成の絶對的限界であり、構成不可能と考へねばならぬ。(III. s. 293ff.)

質に關してかくの如き非合理性を主張する所の思想は、一種の多元論としてのアトミステイークと共に、今迄も見ても來た如く絶えずシェリングの思想の一面を流れてゐる所のものゝ一つの表はれであつて、此れは凡ての段階に於いて何らかの形に於いて見られる所のものである。例へば前の段階に於いては經驗的なるものへの衝動ドラシクに於いて、又方法論的經驗論、もしくは先驗的實證論に於いて見ることが出来る

扱て直觀と反省との分離する點——此の分離は完全なる開展の豫想のもとに於いてのみ可能であるが——から物理學の二つの反對なる方向に分れる、即ち atomistische System と dynamisches System とである。デュナーミツシユな體系は自然の絕對的開展を拒み、綜合としての自然、即主觀としての自然より開展としての自然、即客觀としての自然へ進むに對してアトミステイツシユな體系は根源的なるものとしての開展から綜合としての自然へ進む。前者は直觀の、後者は反省の立場である。兩者とも勿論可能であるが然しアトミステイツシユな體系は連續を説明することが出来ない。何となれば連續は根源的には所産にはなくして生産性へのみ存すると考へねばならぬからである。然し兩體系は觀念的な因子に關係する限りに於いて同じ價値を有し、又互に他の試金石^{プロベ}である。そして生産的自然的の深奥にかくれてゐるものが所産としての自然に於いて反映しなければならぬが故に、アトミステイツシユな體系はデュナーミツシユな體系の絶えざる反映であると云ふ事が出来る。そしてシェリングによれば「草案」に於いては態とアトミステイツシユな方向が取られて居り、「草案」への序論に於いては此れに反してデュナーミツシユな方向が取られて

あること、従つて「草案への序論」に於いて生産性に於いて示されたことが「草案」に於いては所産に於いて示されてゐることが注意せらるべきであると云つてゐる。(Yol, III, s. 297)

又「動的過程の一般的演繹」に於いては原子論的アトミスティシエ説明法と動的説明法デュナミシエとを對立せしめて原子論的説明法によつては此の或はかの物理學者が、若し彼れが自然であつたならば或は若し彼れが例へば磁氣的又は電氣的現象を産出するとすれば如何になしたであらうかといふ事のみを人は知るが動的説明法を適當に用ふることによつて人は自然そのものがそれを如何になすかと云ふ事を知るのであると云つてゐる。此れは察するに原子論的説明はやはり單に所産の立場であり、反省の立場であるが故にそれに於いては眞の連續性は考へられない。従つて此の立場に於いて自然を、而かも連續性を有する自然を構成せんとすれば、必然的にそれら所産を結びつけんとする所のものを即ち、此の或はかの物理學者(即ち直觀を)を求めなければならぬのである。然るに直觀の立場であり、生産性の立場である所の動的説明の立場にあつてはそれ自らの中に連續性がある。従つて此れに於いては生産性が所産に移り行くこと、或は生産性が物質化マテリアリゼーレする過程を明かにすることそのことによつて直ちに自

然そのものゝ構成が明かとなる筈であるからである。一言にて云へば原子論的説法は反省の立場として自然の説明に於いて尙純客觀的なる自然そのものゝ立場に徹してゐない。客觀的なるものとしての自然に尙主觀的なるものを對立せしめてゐると云ひ得るのであるが、動的説明法は反省に對して直觀の立場として客觀的なるものとしての自然そのものゝ立場に立つのである。此の場合、直觀なる言葉は誤解を招き易いと思はれるが、決して反省に對して反省以前、即ち學的認識以前としての體驗と云ふが如きものではなくして、むしろ、反省に對する思スベクラチオン辨と云ふ意味に解すべきであらう。勿論思辨もシェリングの云ふ「眞の實驗」(wahre Experiment)として廣義に於ける反省、即ち自由による對象の考察でなければならぬ。何となればマテリーとしての自然のデユナーミツシユな過程、並に先驗的過程は決して所謂直觀に於いても又自然的な、經驗的な意識に於いても現はれるのではなくして、それらに對してはむしろ技巧的と考へられる所の先驗的考察法トランツェンデンターレトラーヘトウシツに於いて現はれるが故であるからである。此の意味に於いては決して反省に對するのではない、否むしろ先驗的考察としての哲學そのものゝ本質が實にかくの如き反省にあると云はねばならぬであらう。更に詳しく云へば此の先驗的考察は自然哲學に對する先驗哲學獨特

のものではなくして、見るものが又見られるものとなる、即ち自らを客観になしうる所の絶對者に於いて成立する所の哲學一般の方法でなければならぬ。而して此れは前にのべた如く勿論單に對象を分析する所の論理的な働きではなく同時に此れを、そのものが通過する所の必然的なるモメントを動的にもしくは發展的に綜合する所の働きを含んでゐなければならぬのである。かゝる働を思辨と云ひ又直觀の立場と云ふのである。何となれば此れは絶えず具體的意識の段階を背後におきつゝ、單に對象を分離抽象するのみでなく、それを合一綜合しそして對象そのものゝ立場に於いて、構成を進めて行くことを含んでゐるからである。自然哲學に於いては純客觀的にマテリーそのものゝ生産の立場に即する所の動的構成 *dynamische Kon-
struction* の立場が此れに外ならない。√従つて此の直觀の立場と云ふ事は又廣義にそれ自身としてはも早や直觀の段階ではなく、自然は尙無意識的なる生産として直觀の段階と考へられるが、反省の段階と考へられる所の精神、或は意識の世界に於いても(即ち先驗哲學の對象に於いても)自然哲學に於けるデユナーミツシユな過程に相應して、此の場合は、むしろ純主觀的に、意識そのものゝ生産の立場に即しつゝ、その生的過程を明かにするが如き立場は、やはり直觀の立場と呼ぶことが出來、それに對

して對象そのもの、生産の立場に徹せず、それに一つになることなしにその立場に對して他の立場を混ざる時、即ち對象とそれに對立するものとの對立を考へる如きは反省の立場と云ふ事が出来るであらう。従つて吾々は決して直觀なる言葉に迷はされるべきではない。

十三

以上主として自然哲學を中心としてその方法論的方面を考察したのであるが次には知識論である所の先驗哲學の方法に對して一瞥を與へて見やう。

此の期の自然哲學に對する先驗哲學の體系的な地位については前にのべた所で大體明らかであると思ふが、更に先驗的觀念論の體系の序論に於いて次の如く述べられてゐる。哲學は知識の事實を説明しなければならぬが凡ての知識は必然的に相反する二つの因子から成り立つてゐる。即ち主觀的なものと客觀的なもの、表象するものと表象されうるもの、換言すれば睿知と自然との合致である。而して此の兩因子は問題解決前には全く對等で何れが何れに依存することも云ひ得ないが故に、此處に二つの根本課題が可能である。即ち客觀的なものが第一とせられ、如何にして睿知が自然にまで達するか、自然は如何にして表象せられるに至るかと云ふ

問と、主觀的なるものが第一とせられ、自然が如何にして睿知にまで到達するかといふ問とである。前者は自然哲學の課題であり、後者は先驗哲學の課題である。従つて此處に哲學の必然的なる二根本學が存することになる。先驗哲學は決して哲學の全體系ではなくしてその一根本學にすぎないのである。

かくて此の先驗的觀念論の體系も知識の説明の根據として主觀的なるもの、睿知をどるのであるが、此の點に於いて吾々はフイヒテの知識學と方法論的にある種の類似を認めることが出来るのである。何となればフイヒテも知識學に於いて凡ての知識の根據として主觀的な自我即ち睿知を立てゝゝあるからである。然し乍ら兩者の間には勿論區別が存する。そして此の區別は主として自然哲學によつて制約せられてゐるのである。何となればフイヒテに於いては自我が凡てゝあり、自我の全範圍が即ち體系の全範圍であつたが、シェリングに於いては、自然の自我よりの獨立性が認められた爲めに自我の全知識の學としての知識學は尙ほその體系をつくしたものであるのではないと考へられる。即ち全知識の體系としては意識的なる自我の知識のみならず無意識的なる自然の知識が包括されねばならぬ。かくの如き全知識の體系を觀念論的に、即ち主觀的なるものを根源として明かにせんとしたのが先驗的

觀念論の體系である。尙フイヒテとの間に、方法そのものに關しても多少の相違を認めることが出来る。それはやはり自然哲學に於いて發見され強調された所の動的方法即ち自己客觀化的方法の先驗哲學への適用であると云ふ事が出来る。此の事については漸次に述べやうと思ふ。

先驗哲學の直接の對象は主觀的なるもの、従つて又知識に於けるその主觀的なるものである。普通の知識に於いては知識それ自身即ち知識の作用はその對象の爲めに看過されるのであるが先驗的考察に於いてはかゝる作用としての知識それ自身が對象となるのである。即ち先驗的知識はかくの如き意味に於いてそれが純主觀的である限り知識の知識である。又普通の思惟はそれの中に働いてゐる所の概念が概念として意識されずにある所の一種の機制であるが先驗的思惟はかゝる機制を中斷し、作用としての概念を意識することによつて概念の概念に高まるのである。又行動に於いても同様であつて普通の行動はやはりその客觀の爲めに行動自身は忘れられるのであるが哲フィロソフィーレン學なる行動は單なる行動ではなくして同時に又此の行動に於ける不斷の自己直觀である。以上の如く先驗的考察法の本性は凡ての他の知識、思惟、行動に於いては意識せられず絶對的に非客觀的である所のも

のも此の考察法に於いては意識せられ、そして客観的となると云ふ事、簡単に云へば主観的なるものゝ不斷なる自己客観化 *ein beständiges sich selbst-objekt-werden des subjekiven* である。(vgl. III. s. 345f.) かくて哲學の仕方の唯一の機關は内官でなければならぬ。(S+) 哲學の客観は例へば數學の客観の如く——數學の全存在も勿論直観にもとづくのであるが、然し數學の客観は外的直観であり、又數學者は哲學者とことなり唯構成されたるものゝみに關係し、決して構成作用そのものに關係しない——數學的圖形を描く等の如き事によつては決して強制することは出来ない。哲學の全客観は唯、一定の法則による睿知の行動そのものに外ならないが故に、此れは唯だ自らの直接なる内的直観によつて理解されるのみである。而してかゝる内的直観が可能ならんが爲めには第一に不斷の内的活動、即ち睿知の根源的なる行動の不斷の生産と、第二に此の生産に對する不斷の反省〔直観すること〕が、一言にて云へば人は同時に直観せられたるものであり、直観するものであると云ふ事が必要である。

かゝる内的直観こそ知的直観に外ならない。知的直観の對象は自己自身のみである。主観的なるものとしての睿知、或は自我の自己直観が知的直観である。更に詳しく考へて見やう。自我は全く絶對的に非客観的なるもの、純粹作用純粹行従つ

て此れは働くことが直ちに在ることではなければならぬ。自我が働くとは即ち自らを見ることに外ならないが故に、自らを見ることに直ちに自らの存在することであり、自らの存在する事は直ちに自らを見ることに外ならない。かくの如き自我が若し凡ての知識の原理として何らかの意味で知識の客観とならなければならぬとすれば、それは普通の知識とは全く異つた知識によつてゝなければならぬ。他の知識は皆制約せられ、従つて自由ではないが、かゝる知識は先づ絶對自由な知識で、勿論證明や推論や一般に概念の媒介によらない所の知識、従つて一般に直観でなければならぬ。第二にそれはその客観がそれより獨立してゐない所の知識、従つて同時にその客観の生産である所の知識、即一般に自由に生産し乍ら而かも生産するものと生産されるものとが一つである所の直観でなければならぬ。かゝる直観が感性的直観——それに於いては直観されたものと直観作用そのものとは異つてゐる——とは區別されて知的直観と呼ばれるのである。

かゝる知的直観は凡ての先驗的思惟の機關であつて、かゝるものなしには先驗哲學は全然理解されることは出来ない。何となれば先驗的思惟は既にのべた如く自由によつて自己を客観となさんとするものであるからである。(III. s. 369)

かくて此の知的直観が、それによつて可能となる。ところの制約、即ち單に存在し行動するのみならず、同時にその行動に於いて自らを直観する所の睿知、彼れが定立する所のものを同時に認識する所の睿知、換言すれば存在（グイ）と知識、實在性と觀念性なる二つの因子の同（イデ、タイプ、テト）一、即ち睿知の自覺——何となれば此の二つの因子は一つの睿知の因子なるが故に、此の同一は即ち睿知の自覺に外ならない——こそ先驗哲學の原理である。

以上の如き機關、原理より必然的に又その方法が導かれる。此の方法とは即ち純粹に主觀的なるものとしての睿知、或は自我の絶えざる自己客觀化、即ちシェリングの云ふ客觀的方法に外ならない。「此の方法の原理とは即ち前の段階、或はかゝるものに於いて自ら生産した所のものが絶えず次の高き段階に於いて對象客觀（客觀）となる」と云ふ事にある。従つて此の方法に於いては自然の最も低きものからその凡ての段階を通つて人間の意識にまで、此處から再び人間精神の種々なる領域を通つて高まりつゝ、遂に最後のそして最高の理念、即凡てに君臨する所の主觀に於いて終る所の仕方が存してゐる。（ル）*

かくの如く哲學の方法は睿知の絶えず高まり行くところの立場の發展換言すれば睿知の自覺の發展、或は歴史に基づく事は明かである。自覺の歴史——此れが先驗哲學の明かにすべき課題に外ならない。

かゝる自覺の歴史を明かにするには哲學者は如何なる仕方を取るか。先づ哲學者はかの自覺の根源的なる作用を如何にして知るか。「それは直接にはなくして推論によつてゝある。即ち私は私が如何なる瞬間に於いても唯かくの如き作用によつてのみ自身に對して生起するといふ事を哲學に於いて見出す。従つて私は同様にかくの如き作用によつてのみ根源的に生起したに相違ないと推論する。」(III, 395ff.) かくて根源的なる作用を作用として認めるとしても、然らば次にその特定の内容を如何にして確證するのであるか。それは疑もなく此の根源的なる作用の自由なる模倣 *freie Nachahmung* によつてゝある。凡ての哲學は此の自由なる模倣によつて始まるのである。然し哲學者の反省は勿論、一定の時間點に於いて起るのであるが自覺の根源的作用は、然しそれによつて始めて時間が構成せらるゝが如きものであるが故に、かゝる根源的作用と、第二次的なる反省作用との一致が如何にして保證せられるか。根源的なる自覺の作用に於いて今迄必然的なる、非隨意的なる表象

の系列であつた所のものが自我の自由なる反省によつて中斷——かゝる中斷によつて哲學が始まるのであるが——せられる事によつて始めて隨意的になるのであるが、此の兩作用の同一は果たして如何にして哲學者によつて知られるのであるか。此の事も自我もしくは睿知そのものゝ本性を眞に洞察することによつて、即ち自我は自身の行動によつてのみ生ずるといふ事を洞察する事によつて、時間系列の眞中に於ける自由なる作用によつて——此れによつてのみ自我が生ずるのである——私には根源的に、そして凡ゆる時間を超えて私に生ずる所のものゝみが生じうる事を洞察するに至るのである。のみならず自我は無限なる生成であるが故に、自覺のかの根源的作用も絶えず持續する。従つて私は私に對して根源的に生起すると同様に如何なる瞬時に於いても生起する事が出来るのである。

かくて哲學一般は自覺の根源的なる、或は本源オリギナル的なる行動の系列の自由なる模倣、自由なる反覆と云ふ事になる。而して此の模倣の完全である場合には完全なる哲學が生ずるのである。前の系列は後の系列に關して實在レアル的であり、後の系列は前の系列に關して觀念イデアル的である。

然し此の自由なる模倣、自由なる反覆と云ふ事は果たして如何なる事であるか。

54
普通に模倣と云へば勿論或る出來上つた、固定せる對象の模倣、例へば鏡が物を寫すが如きことゝ考へられる。然し此の自由なる模倣は決してかくの如き素朴實在論的な意味に解すべきではない。かゝるものは「自由なる模倣ではなくして、むしろ」必然なる模倣と云はねばならぬ。自由なる模倣とは單なる模倣、もしくは反覆ではなくして、一種の構成、或は生産と考へねばならぬ。然し又模倣、反覆と云ふ以上は單なる構成もしくは生産でもなくして、何らかの仕方です更に取扱はるべき對象が與へられてゐる事でなければならぬ。かくの如く考へるならば此の自由なる模倣、或は反覆とは即ち再構成、もしくは再生産といふ事になるであらう。即ち睿知が自らの中に於ける二重性——無限に生産する實在的なる活動と、無限に此れに於いて自らを直觀せんとする觀念的なる活動との——によつて無限に開展する所の根源的なる自覺の行動は即ち根源的なる構成に外ならない。此れに對して自由なる反省によつて、云はゞ時期(段階)を劃する所の行動のみを數へ舉げて、それら相互の必然的なる關聯を再び構成する事によつて、自覺の云はゞ歴史を明かにせんとする事は即ち自由なる模倣、もしくは反覆と呼ばれるのである。かくの如く考へるならば一方に於いて「凡ての哲學は生産的である。」(III. s. 351)或は又かの「自然について哲學すること

は自然を創造シヤツフエンすることである。」等といふ立言と、他方に於いてかくの如き「凡ての哲學は自由なる模倣、反覆である」と云ふ立言との間にも矛盾は考へられないであらう。

尙シエリングは哲學の本質をかくの如く自由なる再構成と考へるのみならず、凡ての認識を、従つて勿論哲學的認識をも、プラトンに従つて想起にあると主張する。

(vgl. IV s. 77) 認識は勿論自然の働きではなくして、睿知の——而かも無意識的な睿知のそれではなくして意識的な睿知の——働き、換言すれば理性の働きである。

而して意識的な睿知は實は、無意識的な睿知即ち自然の絶えざる展相化、即ち種々の段階を通過して發展したる結果である。然るに此の場合若し此の睿知の發展に於いて睿知が全然何物をも、即ち如何なる片身ゼンクマールをも残さなかつたならば、後に睿知が理性を持つてそれを再生することも不可能であらう。かくて凡ての認識は全く不可能となるであらう。従つて睿知の此の絶えざる展相化に於いて、必ず各段階に於ける云はゞ先驗的記憶 *transzendentes Gedächtnis* とも名づくべきものが残されてゐなければならぬ。かゝるものが經驗的な、見ることの出来る事物によつて蘇らされて、始めて現實の認識が成立するのである。認識をば單に對象の外面的なるもの表面的なるもの、即ち單なる現はれを知るにすぎないものとせずして、對象の本質を眞

に捕捉するものと考へるならば對象そのものと我との本質上の同一性を豫想せざるを得ない。然し此の事はシェリングにあつては單に我より、その手段として自然を導くことではなく、自然即無意識的自我の意識的自我への絶えざる展相化と考へられるのであるが、此の展相化、即ち發展に於いて自我は常にそれ／＼の段階に於ける自らの姿を、自らの面影を、その意識の奥底に沈ませつゝ、殘してゐるのである。かくの如き云はゞ眠れる魂の面影の蘇りが即ち認識であり、凡ての哲學は吾々が自然と一つであつた所の状態の想起である。」

成程、九九年の自然哲學には例へば「決して吾々が自然を認識するのではなくして、自然はアプリオリに在るのである。即ち自然に於ける個々のものは豫め全體によつて、即ち自然一般の理念によつて限定せられてゐる。」(III. s. 279)の如き存在論的な、従つて自然とその認識との獨立性を認め、今迄のべた如き同一性、内的關聯を認めないかの如き言葉が見られる。自然はそれ自身の二重性によつて發展し、その部分は一アプリオリにその全體によつて規定されて居り、吾々が此れを認識すると否とには一向關係はない。換言すれば、ある意味に於いて自然そのものゝ存在論的範疇と、その認識論的範疇との獨立性が認められてゐると考へられる。然し乍ら更に

翻つて考へて見れば此れは單に自然哲學の中での事であつて先驗哲學の立場に於いては又異なるのである。のみならず此の場合、認識の概念そのものも二様に區別しなければならぬ様に思はれる。何となれば先づ先驗哲學の立場では自然そのものも自覺より即ち精神もしくは睿知の自己認識より説明するが故である。かくて自然は未だ自覺せざる即ち理論的なる睿知の發展となる。従つて自然哲學に於いて自然それ自身のアプリアオリなる過程と見られたるものも又睿知の自己認識の過程となり、前に存在の範疇として、認識の範疇より獨立と考へられたるものも又勿論——前の認識とは明かに別なる意味に於いてはあるが——認識の範疇と考へられるのである。然らば同じく自然に關して此の場合の認識と前の場合の認識とは如何に異なるか。前の場合に於ける認識は意識せる睿知の認識を意味し、後の場合の認識は無意識なる睿知のそれを意味してゐる。前の認識は想エルイネツツ起としての普通の認識であるが、後の認識は想起の根柢となるべき對象と自己との無意識的なる純粹同一であり、云はゞ未だ眞に自覺せざる自覺、所謂自覺の彼方に於ける自我 *Tot-jahr-sei s des Selbstbewusstseins* の働きにすぎない。然し何れの場合に於いても結局睿知の

意識的であることを問はず、本來單なる存在ではなくして自らが自らの客觀となること云ふ事即ちその存在はその活動と同一であること、もしくは、その直觀と存在との同一であることにあるのである。従つて審知の働きに於いては認識の範疇と存在の範疇とは決して別ではない。然し自然としての無意識的なる審知に於いてはかくの如き同一性は勿論意識されない。唯自然哲學の方面よりアブリオリな自然の活動として考察されるのみである。意識的なる働きに於いても、普通の認識に於いてはやはり自然と自我との對立の立場に止まる限り、かゝる同一性は認められない。此れは唯だ哲學的認識に於いて自由による知的直觀の中に於いて始めて確證せられるのである。

扱てシェリングは再構成としての自由なる模倣によつて或は先驗的記憶の想起によつて、自覺の歴史を明かにせんとしたのであるが、此處に此の根源的なる自覺の二重性の抗爭による發展の仕方として、従つて又それを自由に模倣し、追體驗しつゝ反省するところの仕方として常に綜合的方法 *synthetische Methode* が用ひられてゐる。「自覺の根源的作用から唯制限されてゐる事のみが演繹されることが出來た。若し自我が自分自身に對して、制限されてゐるべきであつたならば、自我はかかるものと

して自己を直観しなければならなかつた。此の直観、即ち制限されざる自我と制限された自我との媒介者は感覺であつた。此の作用に就ては意識の中には上述の理由から受動性の單なる根跡が残つてゐるのである。感覺のこの作用は従つてそれ自身再び客觀にせられ、そして此の作用が如何にして意識に現はれるかが示されねばならぬ。吾々が此の課題を一つの新しい作用によつて解決し得るであらう事は容易に察せられる。此の事は全く綜合的方法の道によつてゐる。a及b(主觀と客觀)なる二つの對立はxなる行動によつて統一される。然しxの中にはcとd(感覺するものと感覺せられたるもの)なる一つの新しい對立がある。xなる行動は従つてそれ自身再び客觀となる。その行動自身は唯一つの新しい行動zによつてのみ説明せられる。此れは恐らく再び一つの對立を含む……」(III. s. 412)

此の綜合的過程、もしくは後にはヘーゲルによつて著明となつた言葉を用ふるならば辯證的過程について更に考察して見たい。a及bなる對立(今は此の對立より出發するが實は先づ最初に絶對的に同一なるものがかく別れる所の自覺の根源的な作用が考へられねばならぬ。此れは即ち自己直観一般の作用に外ならない。従つて此の作用によつては尙、限定されたものが自我の中へは定立される事は出來な

60
い。と云ふのは此の作用によつて始めて凡ての限定性一般が定立せられるからである。(vgl. III. s. 631 ff.)]が x なる行動によつて統一せられると云ふ事は a 及 b なる二つの根源的活動の對立により、その共通なる所産 x によつて兩者が媒介せられて統一せられるといふ事である。具體的に云ふならば自我に於ける無限に生産する所の實在なる活動と、それに於いて自らを直觀する無限なる觀念的活動、即ち無限に制限せられざる活動と無限に制限する活動との對立の結果、根源的感覺なる所産を生じ此れによつて兩者は統一せられる。此の事は即ち自我が、よつて以つて彼の活動の客觀的なるもの、中へ定立されたかの限定性を直觀すると云ふ事である。此の事によつて自我は始めて自分自身に對して(今迄は哲學者に對してのみ客觀であつたが)客觀となるのである。換言すれば今迄自らを見る事の出來なかつた自我が感覺なる所産に於いて自らを見る事が出來たと云ふ事であり、従つて根源的なる對立の立場より、更に一段高き立場に上つて前の對立を包んだ事であり、又自覺の點から云へば此處に始めて自覺の歴史の最初の一步が踏み出されたと見ることが出来るのである。然るに自我は決して完全に自らを見ることが出來ない。見られざる自己、照らされざる自己が常に背後に残るのである。即ち眞に觀念的なる

自我、眞に見る我は絶えず、客観化されざるものとして残るのである。かくの如き觀念的なる自我の働が云はゞ無限なる自覺の開展を可能ならしめるのである。(V. 11. III. s. 399) かくて a 及 b の統一の x が必然的に又 e 及 d、感覺するもの、感覺せられたるものに別れて、更に此の兩者を統一する働きを必要とする。換言すれば自我は更に此の感覺するもの、感覺せられたるもの、兩者を包んだ一層高き立場、一層深き自覺を掘り下げるのである。かくて此處に又生産的直觀が現はれる。此處に於いて自我は又感覺するものとして自分自身に對して客觀となるのであるが、かくの如く對立より綜合に進むのはシェリングにあつては直ちに自覺の深まり行く過程に外ならない。而して此の自覺の深まり行く過程は即ち睿知自らの自己客観化の過程である。

扱てかゝる睿知の自己客観化の過程は他の言葉で現はすならば先驗生成的過程と云ふ事が出来るであらう。マテリーとしての自然の自己生産的過程としてのデユナーミツシュな過程が決して經驗的な過程ではなかつた様に此の睿知の自己客観化としての先驗的過程も決して經驗的なる意識の過程ではない。従つて此の哲學が示すところの自覺の歴史、諸の段階の開展は決して經驗的時間的繼起の意味を

82
 有しない。本質としての睿知の歩み來れる足跡を示すにすぎない。而して此の足跡は勿論經驗的な、客觀的な所産としての具體的な意識の分析により、永遠なるもの、必然的なるものとしてのモメント或は段階を見出して、最も低きものより高きものに至るまでそれら相互の間の必然的なる關聯を明かにせんとするのである。従つてかゝるモメント、或は段階は根源的なるものに於いては勿論分離せられず、合一せられて居り、具體的なる最後の所産に於いてもやはり唯だ一つの具體的なるものの中に、先驗的なる記憶として包まれ、沈められてゐるのである。此れを先驗的分析によつてモメントに分ち「繼起的に云はゞ眼前に成立せしめる」のである。(vgl. III, s. 399)

最後に前期以來、明確に取られて來たかゝる生成的方法の根源の變化について注意を向けて見たい。既に „Abhandlungen zur Erfahrung“ に於いても自我そのもの、動的本性、即ち無限なる生成の故に此れを對象とする所の哲學も必然的に生成的な方法をとらねばならぬことが述べられ、そしてかくの如き生成的方法の根源として、換言すればかゝる方法が常に豫想し又それに還り行くべき所の目標として自我或は精神が考へられてゐた。當時に於いては尙フイヒテの影響の強い時代として、此の自我精神は單に主觀なるもの、物にならざるものであり、客觀的なる自然を未だ知

らざるものであつたと云ふ事が出来る。

然るに九九年の *Erster Entwurf* 及び *Einführung zu dem Entwurf* 等に於いては自我より獨立せる自然なる根本思想のもとに生成的方法は一轉して、自我より獨立なる自然そのものゝ發展即ち *dynamischer Prozess* に關するものとなり、従つてその方法の根源も前期の如く主觀的なるものゝ中に求められず、むしろ反對に客觀的なるものゝ中に求められた。

然し乍ら一八〇〇年に至つて獨立なるものとしての自然も實は自我——勿論無意識的に行動する限りに於いての——の働きであり、自我の働きの中にも自然よりの絶えざる展相化の段階が云はゞ先驗的記憶として含まれてゐると考へられるに及んで生成的方法の根源は今迄の純主觀、純客觀に求められなくなり、主觀及客觀、自我及自然の同一への方向に求められんとするに至つたのである。

然し乍ら一八〇〇年に於いては此の要求は尙ほ完全に實現されること能はず、云はゞ過渡期にあるものと見る事が出来ると思ふ。即ち一方に於いて、*Allgemeine Deduktion des dynamischen Processes* は自然哲學の立場に立ち客觀的なるものを基礎にしつゝも、その裏には既に同一的なる立場をほのめかしてゐるに對して、他方 *System*

64 des transzendentalen Idealismus は先驗哲學の立場に立つて即ち主觀的なるものを根柢にしつゝも、その背後にはやはり同一的なる立場を暗示してゐると見ることが出来るのである。かくて一方は客觀的なる方面より、他方は主觀的なる方面より、共に生成的方法の根源をば主觀及客觀の具體的なる同一に求める所の一八〇一年及一八〇二年の同一哲學への移り行きを示してゐると見ることが出来るのである。(未完)